



柏の葉キャンパス内に薬用植物・機能性植物の 種苗開発・供給拠点を構築

～富士通(株)のICTを用いた栽培方法の標準化と実証研究により国内の産地形成を支援～

千葉大学環境健康フィールド科学センター（柏の葉キャンパス）の渡辺均准教授の研究グループは富士通株式会社（以下、富士通(株)）との共同研究の成果を基に、同センター内に薬用植物・機能性植物の種苗に関する栽培拠点をづくり、その苗を用いた栽培の標準化および生育環境と生育状況の関連性を可視化する実証研究を全国各地で開始する。

■薬用植物・機能性植物の安定供給をめざして

薬用植物・機能性植物は、漢方薬、健康食品、化粧品原料として使用されているが、そのほとんどが海外からの輸入に依存している。世界的な健康志向の高まりと共に、安全・安心かつ安定的な原料供給が望まれており、また、その需要も増加している。一方、地域経済を支える重要な産業である農業は、新規就農の促進、耕作放棄地の有効活用などに合致した新たな経済品目の導入が早急に求められている。しかし、薬用植物・機能性植物の多くは、栽培期間が長く、新規に栽培するには、種苗の確保や高収益に結び付く栽培方法の確立、販路の問題など、多くの課題が存在している。

そこで、千葉大学と富士通(株)は、この課題を解決するため、両者の得意分野を活かし、千葉大学は、優良種苗の開発、高度化セル成型苗生産利用システムを用いた効率的な苗生産技術の開発と栽培技術指導を実施する。富士通(株)は、千葉大学で開発・供給された苗を全国の複数の現場で栽培し、ICTを活用した生育データ・栽培環境データ等を収集し、得られたデータを活用して、薬用植物・機能性植物における栽培環境と生育状況の関連性を可視化する。



◆トウキの早期育苗（一年栽培が実現）



◆大規模栽培試験の様子（大分県）

■今後の展開

本研究で得られる知見を活かし、薬用植物・機能性植物の栽培方法の標準化、品質基準の確立に向け、同センター内に「一般社団法人 日本薬用機能性植物推進機構」を本年3月1日設立した。

今後、本研究で構築する富士通(株)の栽培技術標準化等を支援するシステムを活用し、薬用植物・機能性植物栽培への参入を希望される農業関係者等への栽培指導や、適地適作による同植物の普及と栽培振興を進める。